繪本舊稿

へ13
3332
1

3332
1

十八九
本大學出版部

參考

續本草圖經序

蘭茂秋風敗之人性
于時咤慈害之宜哉味治
則谷乱孩而成逆世式都之
隱士好著說定漫譬物
語而文怪少亂神以成
爲其巧其言奇其畫圖者

月印印曰剡啓雖虛無戲言寓語亦各勸善懲惡存焉吾朋王山孚嘗携此卷篇來示余閱之黃寫奇談初義士忠臣孝子貞女妖僧婦顯世霸良察其藝邪天神事福之鬼神詩之君相高之史官正之實宴之元上帝眼華不聞者於劇言寓語之間得之者有焉於是乎嘗遂之所害者歸其性善之始叢蘭之所敗者逢世之莽視之於篇則未亦稗補世讀者

詩書採蔚兼勿以下
無此篇〻謂邪
于時文化七庚午歲初冬
望吉旦重於豐崗舍
筑士廣

長柄長者 繪本黄鳥墳揔目録

巻之一

裝端

九重死を以て節義顕る話

河内の佐々木源太左エ門が由緒並東へ趣く話

佐々木源太左エ門具足櫃取替る話

河内の佐々木源太左エ門横死の話

巻之二

佐々木家騒動の話

長柄長者の娘梅枝乞食小懸想る話

佐々木親子松原作内と逢話

佐々木源吾渚を縊殺し系図と奪話

巻之三

長者ゟ食を聟ゟ話

源之助長者の方へ来る話

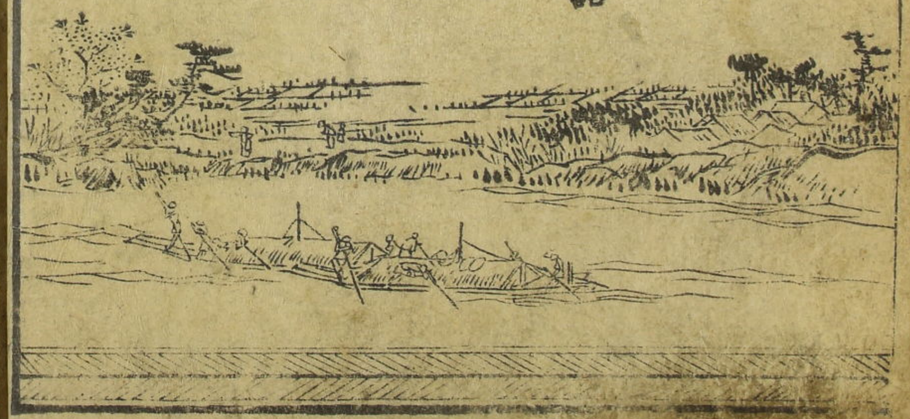
梅枝婚姻環源之助ふ恥辱と興んと計る話

環源之助を毒殺せんと謀る話

巻之四

梅枝環を謀らをて命を落を話

環大仁坊を誘ふて館を出る話



淀興惣左門長者ゟ許を来る長者横死の話

源之助光明山を危難を逢話

巻之五

源之助不計仙窟洞仙を逢話

源之助危難復讐の話

十三郎長柄長者の古屋敷を怪異ふ逢話

巻之六

源之助再び死しる母に逢話
十三郎櫻木忠太夫淀與惣左門を寵話
石川大膳滅亡佐〻木源吾が話
佐〻木長柄両家再興鷺塚由来
河内の姥が火の話

總目錄畢

寶山比丘

積穀帛者不憂饑寒
積道德者不凶邪

報父讐照譽方域
而行道揚名後世

佐二木源之助

烈女愛
黄鳥不
慮需軀
災

女梅枝

秋月揚輝賊
身憎其照鑑
大仁坊

凶儉之士
人不害天
必誅之
僊醫洞仙

不規小節義
心最似金石
妓女伏劒以死
傳貞誠
九重
十三郎

治平而不
忘戰者必
望變安逸
淀與三九衛門
一家亂而顚
父子忠勤
忠太夫
女幾代

不義暴悪者勢
易盡若氷山
佐二木源吾

長柄長者

繪本黄鳥墳巻之一

遠州日阪　栗杖亭鬼卯著

頃ハ弘長元年帝ハ亀山院の御宇鎌倉の将軍ハ宗尊親王執權ハ北條相摸守時宗朝臣ゝゝありけるに爰に宇多源氏の末流世々加賀の國富樫の家ふ仕へく禄三百石をたまはる佐々木源太左ヱ門とゝふ者ゝ家系ハ後ゝ出たるゝ今の源太左ヱ門倭弁のをのなりゝ名ゝ詞をユゝはいつゝゝ勝手役ゝ蒙ゝ金銀をゝがはゝゝ猶皇都の出藩ゝゝ請都の営中ゝゝ移り三ヶ年の月日ゝ送ゝゝるふゝゝの頃ゝゝゝ島原ゝ通ひ格梗屋の九重ゝゝ松位ふ心をかけ多くの金銀ゝ時ちゝけるゝゝ此九重浪花長柄の里に濱野長者ゝゝゝの甥ふ十三郎ゝゝゝ竪道の學びゝ皇都ゝ来ゝゝゝゝゝゝ不斗九重ふ引深ふ深く言ふゝけるゆゑふ源太左ヱ門ゝゝ難面のゝ饗応五度ふ一度ゝ

島原
桔梗屋
九重太夫
十三郎と
深く契る
加賀源左衛門

九重
十三郎

て逆ざうける源太左衛門いよ〳〵心を労し〳〵やうな仲居さへに多く物ごゝを
くいろ〳〵いひ指へなきども兎角十三郎が方へのゝ心河内家なる田舎勤も疎ふ
成ぬるまで主夫婦さへ〳〵異見をなし〳〵表向へ絶口〳〵なれど恐じくふ文
こゝろやし〳〵密室へ出舎なれを源太左衛門聞出〳〵扨はかゝる間夫の有る
いと我等が金銀を芥のめくつらせ獨寐のくさせ〳〵妬はよう〳〵く身
清〳〵と貞はきゝ孫ども其十三郎とやうに自然ぬすんでと夫守れ掛家ふ黄
金五百両公用の〳〵言付て其金ゆく九重と受出をに極りなれ九重を
胸はぶいとゝゆく十三郎がかゝ言ひける此時十三郎も京学のうち多く
金銀とはうひ捨なきゝ長柄長者密に人をもて侯子と窺せなふ島ぐ
九重て人女ふはどひく学びもなきぞうれ歩行よつぶられ聞えけまば
叔父の長者大ふ怒り彼い父もうく母もなく家方ふ幼うなよう養ひおさ

せんとす仁術をも業とるさせんと多くの金銀を入て学びさせ
にゝ〳〵不瀬の振舞ひくく家を納う者よりく〳〵頻ふ勘當
く離ちやるなし〳〵と息炎〳〵家長忠大夫うめくといさえん
家君よりを姫の侯子二人すゝやせども男の侯子とそはたいさびゆく
なゝ十三郎君侯聟ぐふうと別家の者どもと中合ねびさびの
御怒り侯うぐ免なひ一先呼戻〳〵紀明〳〵ぐ侯心も紀〳〵なり
ないとんと真心を顕〳〵言ちゝ〳〵なれば長者ハ頭を右左ふ打ふ
いる左よりうく議よも三ツ子の癖百とせやそといふ事あり〳〵性
根あうりの家先祖人ばらとうりて諸人よ代て其餘先どうう子
年ちく連綿と相續せ〳〵家を断絶さぬんやうる〳〵聟養ふ
ふうて定めうん十三郎が事ハ假令蘇秦が来そう家に説やも

ゆくと事なりがてらと奥へ入るときに忠夫も今はせんなきべくと一色の金を添皇都へ此趣を言やりくれば十三郎は仰天してこは何ぞん太夫が方よりの身請の事は言こし胸さわぎ折ふ叔父なる人の勘當を受く何国へや行だると忙然とあきれて居るふに師の元へも長者より言こしくれば師も常々一向異見を加えるに馬耳風ふ聞るしくるときに十三郎を呼出し常々の不行跡はうどく立處生への見せしめ免ふ即時に師亭を追出し

十三郎はうろく叔父と師匠ふ勘當受け東西もときまえ暫しく居うけるがやうやくに九重が俤立そい所詮今一目太夫に逢く夫を今生の思ひ出にくれ淵川へも身は投げ死やと一包の金は懐ふして島原へ急ぎけり

九重死は以く節を顕を話

十三郎は人目せく編笠を打冠て通ひ馴し出口の柳もいとゆかしく桔梗屋のうちへ覗きけるに只今九重身受なして廓を出行と見えて家内の賑しき大うるさく万燈のめくとり火はなりて乗物を庭ふ入れば九重は打ちほれ立ちふく涙ぐく乗物へのりこむ花車亭主も大きやうする聲にて随分達者よりてよみどと友女郎もいとくと見送るさまうれば扱は面を赤ゑ帯とかへ名せしかく身受せしまと今宵行なるん彼つもぐく言しいたく何国へ身請せしかくもは身は柄よはゆまさば釵の中をも踊り越く参り行末ぐく契るべと言しが我く長柄をも追出さるるだる身となるこし

事をもあらぐで透間見るの迯きいぐ當所もるく尋んネ便さ
よ我今宵死出の旅路ふ赴く事をもあらぐも我事ハなりひ切せく
帶ゞ心ふ随ひうばせあて無跡をも彼にとゞまんを本望なるん此
事ぢらぐ弱ぐ申と矢立取出しー鼻帋ふ行燈の火うげハをけく
涙に目も見えわるゞもどもやうくとかい認め如何して渡さんと千ミ
ふ心ハ配るうちゝ申轎史九条の畑道へ舁出しるるハ兎や兎角
やせんと同じく追うけ手頃の石を拾ひうの袂をくゝる付人離迯
所るるく嫁入を祝ひまんゝをとうの石と乘物の中へ投入るり着黨
中間ども大ふ驚きとハ狼藉者のごとすゞと立さらげバ九重乘物
の内より声をかけ驚ぐ事かうきゝ都のなるゝひ石打の祝儀るあ所
うしバ其人ハ驚ゝとぞうゝび灯燈うそと取寄石にくるるみと

よみうう何角紅粉華ゝるゝ鼻帋ふ書かの石を畑の中へ投やり
ふげく乘物とやるせけふ十三郎ハ芋畑に身と忍び拵るを伺ひ
した九重何やるん一筆書るるハ見くいまび乘物やるゝ迯ーかの
石を拾ひあげ見ぎるもいやめくに闇夜るれバ文字もるぶ手く
兎せん角せんとやりふ内島原への町飛脚灯燈打ふり来うると
暫ーとぼるるいうハかるゝ鼻帋の袂を見るるまび君ゞ
一日ハ情よ妾ゞ百ゝ弱の命を捨死後ハかるゝび家母妹ゞるを
たのゝ参ゝるというける扱を彼も我身よゝべるく成るるに心ハ
定め自害と成心よ成るるるふるゝ家死を止ん母妹をこの
ひとゝ恨ーやせるく一目乘物を出る姿うるも今生の暇ふ
見んるの遠くハるうと狂乱のおやく尻引るげ壬生のるく

十三郎
九重大夫死を
悔む
十三郎は
貞烈を頼む

九重

追ひ行くに壬生の町はづれにて乗物を下し大に狼唄し
うなるまで心ゆるして立寄れば嫁君自害なるふとたんぐに灯燈さ
し付けて驚くに十三郎胸ふさがり指覗けば如何にも似
ど心のとけしつぬき早事きれる見えれば天にかくれ地に
倒れ側へ飛のきかやりのうに涙さへ出ずうつとなり正気を
失ひ居ぞ断なるかくうす追くに屋鋪へ注進しくれば源太左門
追取刀にて馳来れどもそや事切れまばかきれ果大口あけて
かつとにらみ死骸をうくと改め見るに傍ふ鼻席に書しみかう
らくと見て懐中へ泣く乗物を屋鋪へ引とりて十三郎ハ傍
なる畑ふ目をくめて一時ばかり夜嵐さへ吹く草の葉
十三郎が身よりかくまば性根つけあらし乗物もなくまば今ハ死
れまさうり追付て死出の山三途の川も諸ともに渡らんとせと
刀にまたがりけしに不思議や此刀木にて作り付るばかりに一向
口ばかりねがこいふとさめぐくめどけども世人ふるまさで身をや
投んと首をや縊んとかまり見廻るとも不斗心附ぬかへりく
今死ぬべき所ふあらば常ぐ九重が医の道みく天下に名波揚
るへとさぐ言つまで何の心もつらぞうくと暮し今此所まて
死も何の面目なくん骸を犬の飼食となるとのふく悪名
のこ残るまんよりや九重が詞ふ随ひ天下乃名医となり叔父の
不興もゆるさまるまで母妹とも安隠ふ考ひ功成名とげる入
道して九重が跡を念頃ふ吊んすを本意ふくんと心決
して去あとも此刀ハ校ざるをいふと再び引校ふ何事ぞく校校

さるべき叔父九重が霊魂の家死を止めてあり多紀ふと思ふを
いとゞ涙おゞゝ忠太夫が送りし一色の金はもて何国ともなく出
行るまに此後いゞなうゝや後の章を見るべし

河内の佐々木源太左衛門が由緒並東へ赴く話

爰に字多天皇九代後裔佐々木三郎盛綱入道ゝゝその西念と
号次其子太郎信実其子次郎実季其子左衛門実綱其子
長綱源太左衛門と号是より代々河内の郡司と成又源太左衛門
兄弟五人ありて次男と実恭と号し此実恭加賀へ立越佐々木
氏を継其子源太左衛門実頼と号す富樫氏の幕下となる
先に説し加州の源太左衛門是なり扨も河内は源太左衛門を
代ゝ篤実の君子なりゝゝ旭九の名釵三条小鍛治が作並に系

図の美物等此家に傳へゝゝ家富栄えゝ紀今の源太左衛門
ゝゝゝ智勇は士なれども殊に風雅を好み茶道に心ざし世哥連
哥の道もゝゝゝゝゝ妻を同じ国渚の里に楠家の一族より嫁
向へ里の名を其侭渚と唱へゝゝ階老の契浅ゝゝ次程なく一子を
もうけ源之助とよびけるが天性の美童にゝゝ源の光在五乃
昔男も是にを増るべきと成人をまちゝ紀主茶道のたしなみ
生駒山に宝山比丘ゝゝ尊き僧のおとずれて常に茶會
の客ゝれし奉て佛の道をも序ちなう聞給る其頃家相ゝゝに
るれ流行ゝ家居の模様さゆゝに作り替ゝ紀が源太左衛門
物語の序家相紙たづね求めゝ比丘暫ゝ沉吟して大に驚き
宣ひゝゝに此家大悪相ゝゝ家内残らず水難の相あり慎て

宝山比丘

宝山比丘河内の源太左ヱ門と水難のがれがたく相ひろ事くともあり
河内源太左ヱ門
源之助

猶惜しむべし又辰巳の石垣の内ゟ水魚石とゝ云ものゝ出ぬ時再び家栄ゆべし此家の先祖水と渡ること多くして
人命を絶しむくひあ〳〵一宗水難まぬかれ　假令家を作
て直ともも先祖の積悪只今むくひ来ぎぜんるゝと大息
嘆〳〵宣へバ源太左エ門なまじゐの事は聞出して深く心ゝ恵と
くども家内の愁んをと恐まく災を退くゝ隠徳ゝ志ゝ
ゆせハ此後ハ隠徳を施しゐくんと言ゝれば比丘も點頭き其日ハ
帰らるゝひけゝ甚頃淀川ゝ川浚のゝ将軍家ゝ人ゝ撰て
なさしめんと摂河泉をたづ孫うゝ此佐〳〵木源太左エ門器量備り
代々家柄の者ゝまバ将軍家ゝ仰事此人ゝ定て鎌倉へ召た
くんとゝのゝおぞゝ思ゝ源太左エ門ハ家の面目ゝ〳〵〳〵清十日と
撰〳〵出立ゝんとゝ思ゝ妻の渚袖ゝ絞〳〵言ゝ云ハ漢日家山
比丘の宣ゝを立聞〳〵待まバ此身ゝ水難の相ゝ〳〵とこそ兼りゝ
いまゝ〳〵ゝ淀川浚の御召ゝまバ則水難ゝ有合〳〵ゝ
仰をいゝ〳〵ゝひても外ゝ代の人〳〵もゝ〳〵ゝんゝれば辞退しゝゝんと
宜〳〵ゝんと涙〳〵ゝふ止めゝれば源太左エ門完ゝと笑ひ世し家
豊ゝ族廣〳〵ゝまハ皆公の半ゝのゝり此度多く其人の中ゝ
選出〳〵ゝハ世ゝゝ〳〵ゝ事なゝずや人間ゝ五十年蜉蝣
の一時何ぞ命をおしゝん假令水難ゝ死ゝるゝも定まゝる因縁
ゝゝ〳〵ゝ忠ゝ死ゝゝ武士の好むゝゝゝ〳〵ゝ源氏助
を大切ゝ家帰ゝ待ゝ東へ下る道ゝまバ宝山比丘ゝ立ゝ
水難ゝけの符ゝ清て〳〵ゝんゝゝ事れあゝゝ心

いとゝえうふかし袖ふり拂ひ出行給ふ

佐〻木源太左エ門具足櫃を取替る話

河内の佐〻木源太左エ門今年四十二歳なれども年より若やかに見え色白く立派の武士長臣松原作左エ門諸事ふかく心を配り供人数多引連出行給ふ爰ふ先達而島原の里九重太夫に心を寄せ〻ふ加州の佐〻木源太左エ門公勢の金と偽り九重を受出せ〻ふ自害〻ぬまでに成り申候何せんと心底痛む折〻太守へも粗其事聞えれば不届と思召三日切の支度あく東へ召下〻ふ佐〻源太左エ門大ふ驚き取とめも取敢ず支度とるまで日頃買掛し高人ども其事底聞より首尾あ〻く出立のよ〻うれば聞つ

へ〻来つて責けるまば源太左エ門金方なく衣類までも賣代ふ〻漸詫〻て毒蛇の口底逃〻わかちうろう夜をよえて京都を出立〻乗物を急ぐ東へこそ赴き給ふ志底ふ濱松のうちまりより河内は源太左衛門と跡よりあり先にあり同じく下つるまに同じ名もつるものうると乗物の中より思ひ〻金谷の宿まで来つるに〻大井川の口明うりて川辺の混雑大〻なれば我一と川越をうめ〻先へ越け〻両方の源太左エ門一度ふ川を越んとせ〻ふ松原作左エ門心きかる者うれば川越に酒料を多く取らせ先へ川をわたる主人は〻〻ふ下部底揃へ荷物底改め河州の佐〻木源太左エ門家来並ふ荷物も残らず渉つ〻やと詞をうく底よ強ら底揃

河内佐々木
源太左ヱ門大井
川ゝそ加賀佐々木
源太左ヱ門の具足
櫓を取替る之図

ひ人足まぐるも滞なく渉つゝと聞えくれば烈しき波
島田は驛まはき日を高くれど無事に渡つゝ祝ひたり
島田の宿に泊りける加州の源太左ヱ門心はいつゝち川ごゝと
くゝ居くゝども兎角戯を出さゝるまゝ漸暮頃よ渡りる同
じく河州の佐〻木が隣の旅宿ふ着く泊つゝ居隣る河
内の佐〻木源太左ヱ門ゝくゝ宿ヱて今宵ハ川越せゝ祝ふ
下部どもに酒呑せよ彖も水雞の事心ふうゝと殊に川明
の大水ゆゑめ何と案じくゝ何るゝ渡るゝの嬉しは
よ有も随分澤山よゝくゝとくゝれば作左ヱ門畏つゝ合
まぞれ御つゝとに金子遣ひ切ぬば具足櫃の金子は出し波
下いやうゝと言けまゝば汝明てよと鍵を渡さゝに受取具足

櫃をゆんゝとゝるふ此内ふ合鎰るゝこいうゝと幾度も合鎰
まゝど合ゝめ何ふいやと尋るに源太左ヱ門いつゝくいそ合如
るゝのあるべきもゝゝ心せゝ時ふハ其事もあることなりいふゝ
一成ゝも明よとゝいるふ畏つゝとして鍵ゝ切蓋押開見る
ゝまゝば具足の類ゝなくて鍋釜十のゝやゝのゝはぢう入ゝる
作左ヱ門驚こるゝの具足櫃の鍵をも打明見まゝど火鉢五徳
などの類ゝあるゝ路用金ハ一銭もゝなくゝまゝいこハくゝいふとゝ言
に源太左ヱ門も立寄ゝまゝばゝゝくゝね道具のゝかまゝば大きふ
き能ゝく見まゝども紋所も四ツ目結ゝく皮覆も替る事ゝ
らゝと心ゝ納ゝくゝ扎ゝと改まゝば佐〻木源太左ヱ門具足とのゝ
ども書法ゝ遠ひゝゝなゝり作左ヱ門言ゝくゝハ先ふ大井川

あるの河州の佐〻木源太左ヱ門荷物ハ揃ひ〳〵やと事〳〵に揃ひ〳〵と言へ〳〵ど扱ハ〻ふ跡先へ成〻〻加賀ゟ佐〻木源太左ヱ門屋の具足と智ちと〳〵ちがふ〻〻ん〻〻ども〻ゆゑに鉄打碎き〻〻す蓋を開きゝ〻〻ゟ言訳なし〳〵め何せんと汗く然〻〻ゟ源太左ヱ門も心ハ痛ゑ先ふ鉄前のあハてといひ〳〵時得と吟味もぐうに扱ふ〻ゟ大事と引出し〳〵〻〻ゟ道中ゟ〻ハ心ゟ〻〻ぐきゝの家具足櫃も佐〻木源太左ヱ門と記せ〳〵ハ大きゝ〻る誤〻〻也〻〻ども〻〻てゆゑ〻ゟ〻ゟ〻ゟ汝此具足櫃をゟ〻ゟ幾重ふも誤〻〻具足櫃を取智来る〻〻と〳〵言〻んハ作左ヱ門も恐る〻〻隣へ行案内して主人ふ貴意得〻〻き旨言入〻ん〻ハ是へ通ら〻〻と坐敷へ通す作左ヱ門具足櫃をかゝふ直〳〵其人ハ見まハ年頃四十ぐらゐ色浅黒く頬骨ゟと眼をゟぐ〻〻髭鬱敷あ〻〻る男の是へ〻〻〻ゟ〻て作左ヱ門頭と下げ主人佐〻木源太左ヱ門と者の具足櫃と尊公様御具足人足ども大井川ゟ〻〻取遠参ゟ〻ハを不存蓋ハ開きれ事失敬多罪此上ゟ〻〻ハゟ〻ハ慈悲の上具足櫃ハ取ゟ〻〻下ゟ〻ゟ生〻世〻のゟめ〻〻と低頭平身〳〵〻〻〻〻〻陀〻ゟ源太左ヱ門ハ蓋ハ開〳〵と聞〻〻間ふ驚ハ〻〻〻ゟ急度悪計とゟ〻〻面ハ和らげ扱〻不思議の事ふハゟのゟ貴殿の主人と我〻ゟ迚〻〻先祖をゟ〻ゟ〻〻〻ゟ〻ハ見参ハせぐ〻〻ども同姓一家存ぜぐ〻意恨ハ存ぜぐ〻参等具足其外相違ゟハ於ハ主人の具足ハ渡〳〵ゟべ〳〵と物やゟ〻〻ハ述〻〻ゟハ作左ヱ門カ

得と具足櫃さ〜出せハ源太左ヱ門立寄開き見るよりハ大ふ仰天せ〜さるゆゑ是ハ昔火の雨降〜時の具足なるや我ホが物ふたゝび定めく是を思ひ召遠るべ〜武士ハ相違まるれば他言ハいなまず早く帰らまと言ふれば作左ヱ門猶もすりようそハ尊公様思召遠ふ所生あるべくばなれば是非とも此方具足櫃ハ返し下さしよと詞を返しくれば源太左ヱ門大に怒り汝下郎不礼の一言武士さるものゝ具足櫃ハ鍋釜迄入おくべきや是ハ汝が主人と言合せ同名ゆ幸に家具足を盗ほんとにさるふゝんよしく二ツの具足櫃を持行汝が主人り誤りとの一札をとりてゆる〜呉人者ども二ツの櫃を隣へもち行ゑ〜と息巻ゆ袴引みり立出まで作左ヱ門も次んゝれく

跡より續くく已ゞ旅宿ふゝとけゝ

河内の佐〜木源太左ヱ門横死の話

後漢書曰禮義生於富足盗竊起於貧窮とゆ加州の住々木源太左ヱ門ハ二ツの具足櫃をもりくしく坐敷へ通れば作左ヱ門ハ恐るく跡ゑ引漆塗鋪ふ付ゝ其時加州乃源太左ヱ門声ふり立くゝ只今そこの御家来鍋釜入し櫃をもりく我具足と替んるゆ者ゑ見るべ〜武士なるゝの具足櫃ゑ鍋釜ハ入置ゝ〜ゆ強に鍔前を打碎しるゝ〜仰越るゝの假令此具足拙者のゝ〜ゆ狼藉のゝうなゝ〜ゆ家来共ゆ角ゆされゝ〜ゆ足下に對面〜て加ゝ無道の振廻武士の上ゆ事ゆ義〜ゝ奉りたゝ

みぐるしくいひそまこび作左ヱ門ハ已ゞ錠前と打割し誤あるを
死も入る紀尾清なる河内の源太左ヱ門少しも恐るゝ気色か
く誠に足下の仰乃如く武士のあるまじきぶりに錠前を打
破きたるの悔なすせんなし鍋釜入しハ家具足なりともやべし
足下の仕具足錠の侭ハ有之べ我ハ内をもくざ仕善なり定
めく足下ハ存知るゝん甲ハ何鎧ハ何色威し軍用金い
う程入ちまし中義とくと言れば源太左ヱ門大ハ仰天して
かくるのるべ中をも改来るべなりしに心せく侭改めざる事
よと思へども猶も弱く見せぬつゝ及ぶ先祖より持伝
へし道具なりて志ゝざゝん去なぐゝ此内ハ改るハ我懐中ハ吟
味せる如くあるの弥足下改しハ跡まてハあるまじ家も旅の

う生べ不事ハ好めば今宵のうちハ隠便かしく家具足ハ持帰る
べし武士道のたるなるべ我口外ハ決まじ貧窮乃
事ハ存ぜれいつくしくいと具足櫃かくゝ帰らんとする
を暫しと引とめ我足下ハ具足櫃の中ハ能知り甲を鍬
形黒糸威し草摺ハ四ツ目結の金物ハ九の箱ハ金子五十
両右の箱ハ七十五両の金子あるを偽なるぶ證據作左ヱ門夫
ハけよと錠打やまべうゝる源太左ヱ門と押のけ錠をひらけむ
一ゝも遠いぶりなれば源太左ヱ門今ハたまりかゝ逃出さんと
作左ヱ門押隔て武士のいまじにかくうゝ我くを罪ゝ落
さんとするつちあくさまくるゆきべ源太左ヱ門押留其者寂
前やせし如く貧窮ゆゑの事と思へどさのゝせむ及ぶもいち

次殊ふ同性同名なれば先祖ハ親しき親族なるべしまして
同じ名字なる必後来なるべしはたして立ると仕なるべし金子十両
を包みて人々をハ源太左エ門ハ人のともいまだ鎧櫃にうへ風の
避はごとく迯去る源太左エ門打笑ひ世をかるる下なる
かくもなるの裁と習の旅用意さやく伏をまバ作左エ門も
心地よしと笑ひ次の間ふ入る休まる加州の源太左エ門を鎧
櫃をまづうち提く帰つる程なく無念骨髄ふ通り寝もやらで
あるるが倩家身のうへ考ふるに国ハ帰ふても京都の首
尾無く知をぬまバ所詮暇のいとんハ必定なり今宵不斗隣
の源太左エ門が金なる事を見置ふれバ彼を殺し無念を敷
し且金ハ奪い立退んと彼が我ふ因果を含るうちに空

敷の極る庭ふ勝手ハよく見置うちうくと獨言を
巳満の鐘を相図ふ前栽の塀をのりとし雖ども縁側ふ忍べ
入極子を伺ふよ源太左衛門ハ霜の草卧ふ前後もさうまま
伏るるにぞ寄をなしうと胸うちにまぐり水のめき及ばりて
板敷まで通まと声をもうけどさし通しれバ嫌むべし
源太左エ門刀をさ抜合さぶ只一刀ふ死うるを敷去もあるかと
さぐり寄鎧櫃押ひうれ二包の金ハ懐中して立出んとせしが
見越の松が枝ふとり付とひうしく此枝ふ門きとかきくぬしハ
大地へどうど落ちり此物音ハ作左エ門次の間より縁先へ
出見をバ怪しれるの庭ふなり扨ハと刀引さけおどろふ再び
塀へたどり上ふうかへ行く手利鈎をかしと打けるハかるれ

加賀の源太左エ門
島田の宿〳〵
河内の源太左エ門を
殺害し銀を
奪ひ立去る図
松原作左エ門
加賀の源太左エ門

駿下駿河に受くるうち獻ハ跡をくらまし何国もうく落行あり

佐々木源太左エ門刀雖ども死とゝへども大井川を具足櫓を取替しよりるれば比丘の先見おきらかなる事を知ハ

今川貞国馬責巻之一終